

【B年】降誕前第6主日(2022年11月13日)

【旧約聖書日課】出エジプト記3章1～15節

¹モーセは、しゅうとでありミディヤンの祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あるとき、その群れを荒れ野の奥へ追って行き、神の山ホレブに來た。²そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。³モーセは言った。「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。」

⁴主は、モーセが道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼が、「はい」と答えると、⁵神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」⁶神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。

⁷主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。⁸それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。⁹見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。¹⁰今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」

¹¹モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」

¹²神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」

¹³モーセは神に尋ねた。

「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」

¹⁴神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだ。」¹⁵神は、更に続けてモーセに命じられた。

「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。

これこそ、とこしえにわたしの名

これこそ、世々にわたしの呼び名。」

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙8章1～13節

¹今述べていることの要点は、わたしたちにはこのような大祭司が与えられていて、天におられる大いなる方の玉座の右の座に着き、²人間ではなく主がお建てになった聖所また真の幕屋で、仕えておられるということなのです。³すべて大祭司は、供え物といけにえを献げるために、任命されています。それで、この方も、何か献げる物を持っておられなければなりません。⁴もし、地上におられるのだとすれば、律法に従って供え物を献げる祭司たちが現にいる以上、この方は決して祭司ではありません。

えなかったでしょう。⁵この祭司たちは、天にあるものの写しであり影であるものに仕えており、そのことは、モーセが幕屋を建てようとしたときに、お告げを受けたとおりです。神は、「見よ、山で示された型どおりに、すべてのものを作れ」と言われたのです。⁶しかし、今、わたしたちの大祭司は、それよりはるかに優れた務めを得ておられます。更にまさった約束に基づいて制定された、更にまさった契約の仲介者になられたからです。⁷もし、あの最初の契約が欠けたところのないものであったなら、第二の契約の余地はなかったでしょう。⁸事実、神はイスラエルの人々を非難して次のように言われています。

『見よ、わたしがイスラエルの家、またユダの家と、新しい契約を結ぶ時が来る』と、

主は言われる。

⁹『それは、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようなものではない。彼らはわたしの契約に忠実でなかったので、わたしも彼らを顧みなかった』と、

主は言われる。

¹⁰『それらの日の後、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである』と、

主は言われる。

『すなわち、わたしの律法を彼らの思いに置き、彼らの心にそれを書きつけよう。わたしは彼らの神となり、

彼らはわたしの民となる。』

¹¹彼らはそれぞれ自分の同胞に、

それぞれ自分の兄弟に、

「主を知れ」と言って教える必要はなくなる。

小さな者から大きな者に至るまで

彼らはすべて、わたしを知るようになり、

¹²わたしは、彼らの不義を教し、

もはや彼らの罪を思い出しはしないからである。』

¹³神は「新しいもの」と言われることによって、最初の契約は古びてしまったと宣言されたのです。年を経て古びたものは、間もなく消えうせます。

【福音書日課】ルカによる福音書20章27～40節

²⁷さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。²⁸「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。²⁹ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないうまま死にました。³⁰次男、³¹三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。³²最後にその女も死にました。³³すると復活の時、その女はたれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」³⁴イエスは言われた。「この世の子らにめとったり嫁いだりするが、³⁵次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。³⁶この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。³⁷死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。³⁸神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」³⁹そこで、律法学者の中には、「先生、立派なお答えです」と言う者もいた。⁴⁰彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

出エジプト記 3章1～15節

1さて、モーセはそのしゅうと、ミデヤンの祭司エトロの羊の群れを飼う者となった。そして、群れを荒れ野の奥に導いて、神の山ホレブに来了。2すると、群れの間に燃えて上がる炎の中に、燃え尽き果れた。彼が見ると、柴は火で燃えていたが、燃え尽き果れることはなかった。3そこでモーセは言った。「道をそれてこの大いなる光景を見よう。なぜ柴は燃え尽きないのだろう。」4主は、彼が道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から呼びかけ、「モーセ、モーセ」と言われた。彼は「御前におります」と言った。5神は言われた。「こちらに近づいてはならない。履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地である。」6さらに言われた。「私はあなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは顔を隠した。神を見るのを恐れたからである。

7主は言われた。「私は、エジプトにおける私の民の苦しみをつぶさに見、追い使う者の前で叫ぶ声を聞いて、その痛みを確かに知った。8それで、私は下って行って、私の民をエジプトの手から救い出し、その地から、豊かで広い地、乳と蜜の流れる地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ベリジ人、ヒビ人、そしてエブス人の住む所に導き上る。9今、イスラエルの人々の叫びが私のもとに届いた。私はエジプト人が彼らを虐げているのを目の当たりにした。10さあ行け。私はあなたをファラオのもとに遣わす。私の民、イスラエルの人々をエジプトから導き出さなさい。」11モーセは神に言った。「私は何者なのでしょう。この私が本当にファラオのもとに行くのですか。私がイスラエルの人々を本当にエジプトから導き出すのですか。」12すると、神は言われた。「私はあなたと共にいる。これが、私があなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたがたはこの山で神に仕えることになる。」

13モーセは神に言った。「御覧ください。今、私はイスラエルの人々のところに行つて、『あなたがたの先祖の神が私をあなたがたのところへ遣わされました』と言うつもりです。すると彼らは、『その名は何か』と私に問うでしょう。私は何と彼らに言いましようか。」14神はモーセに言われた。「私いる、という者である〔ギリシア語訳→私はあるという者だ〕。」そして言われた。「このようにイスラエルの人々に言いなさい。『私はいる』という方が、私をあなたがたに遣わされたのだと。」

15重ねて神はモーセに言われた。「このようにあなたはイスラエルの人々に言いなさい。あなたがたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が私をあなたがたに遣わされました。」

これこそ、とこしえに私の名

これこそ、代々に私の呼び名〔直訳→覚え〕。

ヘブライ人への手紙 8章1～13節

1以上述べたことの要点は、私たちにはこのような大祭司がいて、天で大いなる方の王座の右の座に着き、2人間ではなく主がお建てになった聖所と真の幕屋で、仕えておられるということです。3すべて大祭司は、供え物といけにえを献げるために、任命されています。従って、この方も何か献げる物を持っていなければなりません。4もし、この方が地上におられるとすれば、祭司ではありえないでしょう。律法に従って供え物を献げる人たちがいるからです。5彼らは、天にあるものの雛型〔別訳→写し〕と影に仕えている者にすぎません。そのこと

は、モーセが幕屋を建てようとしたときに、お告げを受けたとおりです。神は、「山で示された型どおりに、注意してすべてのものを作りなさい」と言われたのです。6しかし今、私たちの大祭司は、はるかに優れた務めを得ておられます。この方は、さらにまさった約束に基づいて制定された、さらにまさった約束に基づいて制定された、さらにまさった契約の仲介者だからです。

7もし、あの最初の契約が欠けのないものであったなら、第二の契約が必要になる余地はなかったでしょう。8しかし、神は彼らを責めて、こう言われました。

「『その日が来る。

私はイスラエルの家、およびユダの家と新しい契約を結ぶ』と

主は言われる。

9『それは、私が彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出した日に結んだ契約のようなものではない。彼らが私の契約を守らなかったので、私も彼らを顧みなかった』と

主は言われる。

10『それらの日々の後

私がイスラエルの家と結ぶ契約はこれである』と

主は言われる。

『私は、私の律法を彼らの思いに授け

彼らの心に書き記す。

私は彼らの神となり

彼らは私の民となる。

11彼らは、自分の同胞や兄弟の間で

「主を知れ」と言って教え合うことはない。

小さな者から大きな者に至るまで

彼らは皆、私を知るからである。

12私は、彼らの不正を赦し、

もはや彼らの罪を思い起こすことはない。』」

13神は「新しい契約」と言われることによって、最初の契約は古びたものとされたのです。年を経て古びたものは、間もなく消えうせます。

ルカによる福音書 20章27～40節

27さて、復活はないと言っているサドカイ派のある者たちが近寄って来て、イエスに質問した。28「先生、モーセは私たちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄のために子をもうけねばならない。』29ところで、七人の兄弟がいました。長男は妻を迎えましたが、子がないうまま死にました。30次男、31三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子を残さずに死にました。32最後にその女も死にました。33すると復活の時、彼女は誰の妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」34イエスは言われた。「この世のうらはめとったり嫁いだりするが、35次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。36この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活の子として神の子だからである。37死者が復活することは、モーセも『柴』の箇所、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、明らかにしている。38神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きるからである。」39律法学者の中には、「先生、おっしゃるとおりです」と言う者もいた。40彼らは、もはや、あえて質問することはなかった。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

- ・11月13日「降誕前第6主日」の日課主題は「救いの約束(モーセ)」。この期節は、「待降節」の拡大という趣旨で、「旧約」の主要な主題が取り上げられている。
- ・石神井教会では、「降誕前第6主日」の呼称に代えて、伝統的な呼称である「終末前主日」を用いる。
- ・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、いわゆる「柴の箇所」と呼ばれるモーセの召命物語の箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、「大祭司=キリスト」論を展開する中で、その聖書的論拠を提示していく箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスとサドカイ派の人々との間で交わされた「復活」をめぐる論争を伝える箇所。

旧約日課(出エジプト3章より)

- ・「出エジプト記」は、ユダヤ正典「律法(トーラー)」の第二巻で、「申命記」まで続く「モーセ物語」の最初の書。「モーセ伝承」の中核には、モーセがシナイ山で神から授けられた「掟の石の板」を収めていたとされる「神の箱」の伝承があり、古い時代には「シケム」または「シロ(神殿)」で受け継がれていたものとされている(「ヨシュア記」8:30以下、同18:1、「サムエル記上」4章など参照)。一方、「モーセ伝承」の中でも「出エジプト伝承」は「過越」伝承に中核があり、「神の箱」伝承とは必ずしも重なり合わない。「過越」伝承と「神の箱」伝承をつなぐのは「モーセ」という人物であり、「モーセ伝承物語」としての正典「律法」の第二～第五巻は、「モーセ」その人に働きかけた神、別言すれば「モーセ」を通して働かれた神に関する物語として編纂されている。そこで重要になるのが、「モーセ」が神(主)によって如何に選ばれ、「モーセ」自身そのことに対して如何に自覚を持っていたか、という点であろう。そのことを提示する伝承逸話として、日課箇所の「モーセ」が神からの「召命」を受けたことを伝える「柴の箇所」は、「モーセ物語」全体を基礎づけるものとなっている。なお、「出エジプト記」1～2章に描かれる「モーセ誕生物語」は、一種の英雄伝説であり、エジプトに由来する王位継承をめぐる伝説と関連があると思われる。
- ・日課箇所の冒頭で「モーセ」が「ミディアン」の祭司であるエトロのもとにいたことが描かれているが、これは2章までで物語られてきたことを踏まえている。「ミディアン」は、アブラハムとケトラの子の一人を始祖とするとされる部族で、アラビア半島西岸の「アカバ湾」に面する地域を中心に居住していた遊牧民を指していると考えられている。この「ミディアン人」の「祭司」がモーセの舅として繰り返し登場しており、モーセの神信仰に対する「ミディアン人」の影響を示唆している。
- ・1節「神の山ホレブ」は、物語進行上、「シナイ山」と同一視されている山。「出エジプト記」では、この箇所の他、17:6および33:6で「ホレブ」の山名が用いられているが、それらの箇所はいずれも、民の「不信仰・不忠」を指摘する逸話の中にある。

・この柴の箇所は、神が「モーセ」にご自身の名を告げられた逸話として理解されてきた。すなわち、14節「わたしはある。わたしはあるという者だ」(聖書協会共同訳「私はある、という者である」、口語訳「わたしは有って有る者」、新改訳「わたしは、『わたしはある』という者である」、岩波訳「わたしはなる、わたしがなるものに」、ヘブライ語原文「אֲנִי אֲנִי אֲנִי אֲנִי אֲנִי」)が、直前13節の「その名は一体何か」という問いに対する答えとして理解されてきた。ヘブライ語原文「אֲנִי」は、「ある」を意味する「הָיָה」の変化形で、「主」と訳される「יְהוָה」と同根語で、名称譚として成立している。実際、15節では、「あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主」と名乗られた上で、「これこそ…わたしの名」と告げられている。ただし、「わたしはある」と訳される表現は、「わたしは…いる」とも訳される表現で、12節「わたしは必ずあなたと共にいる」も同表現が用いられている。そこで14節は、12節を受けた言葉として補って意識すれば、「わたしは(あなたと共に)いる者として、(あなたと共に)いる」となり、『わたしと共にいる方としてわたしと共にいる方』がわたしを遣わされた」となる。つまり、この「神」はモーセと一体となって現れられる方であり、モーセの存在そのものがこの「神」の存在を示すと告げている、と解釈することもできる。

・このように解釈するならば、15節の「あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主」も、6節の「あなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」から一步踏み込んで、「先祖の存在と一体の神、アブラハムの存在と一体の神、イサクの存在と一体の神、ヤコブの存在と一体の神、であるところ主」の名乗りであるからこそ、この名は「とこしえ」であり「世々」でありうると解せる。

使徒書日課(ヘブライ8章より)

・「ヘブライ人への手紙」は、新約正典「使徒書」中、「パウロ書簡集」と「公同書簡集」の間に置かれた書簡形式の文書。書簡ならば冒頭にあるべき差出人・宛先などが失われており(末尾の挨拶は残っている)、「使徒文書」性への疑義から、新約正典としての全教会的公認は4世紀末まで遅れたが、2世紀には広く知られていたとされる。書名は、これがユダヤ人キリスト者の教会共同体に向けて著されたものであったという2世紀の教会伝承に基づく。比較的長い書簡文書であるが、内容は、旧約正典「律法」に基づいて「大祭司=キリスト」論を展開し、「大祭司」の執り行う「贖罪日の犠牲奉獻」に基づき贖罪神学を提示することが中心となっている。

・日課箇所は、7章までに「創世記」の伝説的な祭司王メルキゼデクを典拠にしてキリストを「真の天的大祭司」として位置づけたことを受けて、その「大祭司=キリスト」の優位性を「エレミヤ書」(31:31~34)を引用することで示そうとしている。「エレミヤ書」の該当箇所は、「新しい契約の預言」と呼ばれる箇所。

福音書日課(ルカ 20 章より)

・日課箇所は、主イエスがサドカイ派の人々と「復活」に関する論争をされ、その際にモーセの「柴の箇所」を引用されたという逸話。「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して「受難物語」の中の一つの逸話として伝えている。各福音書を比較すると、「マルコ」に対して「マタイ」は内容をより簡略化している一方、「ルカ」はイエスの説明の言葉を補足して加えている。

・「サドカイ派」は、1 世紀のユダヤ教の中でもヘロデ王家と結びついたエルサレム神殿祭司集団を核とした分派で、ヘロデ王家(さらに遡ってハスモン王家)と距離を置く律法学者(ラビ)を指導者とし、おもに諸会堂を拠点としてきた「ファリサイ派」とは対立関係にあったとされる。ファリサイ派は、1 世紀末以降に成立し現代にまで至る「ラビのユダヤ教」の源流とされ、「律法(トーラー)」と「預言者(ナビイーム)」に加えて「諸書(ケトウブイーム)」を重んじ、またこれらのほかに「口伝律法」と呼ばれる伝承を重視していた。一方、サドカイ派は、「律法(トーラー)」のみを正典と認め、そこに提示される神殿祭儀と律法的規範を重んじていた。また、ファリサイ派が「終末の復活信仰」を広く受け入れていたのに対して、サドカイ派はそれを否定し、現世主義の傾向を持っていた。そこで、日課箇所のサドカイ派の問いも、「復活についての問い」というよりは、「復活の矛盾を突こうとする駁論」である。

・37~38 節は、「復活論」というよりは、より基本的な「神論」に根差した教え。「出エジプト記」の解釈で示されるような、「人」と一体化するようにしてその存在を基礎づける存在としての「神」を「主」と呼んでいる。この神論は、「すべての人」(38 節)に適用される普遍的基礎づけとして提示されていることにも注意。

来週の誕生日 (11 月 13 日~19 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-12 番「とうときわが神よ」(= I 16「いとよきみかみよ」)は、17-18 世紀ドイツの敬虔派牧師クラッセルト(クラッセリウス)の作詞。曲は、もともと別の歌詞につけられていたが、1704 年出版の敬虔派讃美歌集でクラッセルトの歌詞と組み合わせられたもので、以後、広く歌われるようになった。J.S.バッハは、クラッセルトの歌詞に自作の旋律をつけている。

・21-127 番「み恵みあふれる」は、19 世紀フィンランド・ルーテル教会信徒でフィンランド文学の教授クロンが自らも携わった讃美歌集に収録した讃美歌。曲は、フィンランドの伝統旋律から採られた。WCC の 1974 年版讃美歌集に採用されて広まった。

・21-510 番「主よ、終わりまで」(= I 338)は、19 世紀英国教会の司祭ボードがこどもたちの堅信礼のために作詞したもので、1954 年版からは改訳されている。曲は、19 世紀英国教会のオルガニスト・アーサー・マンの作曲。現代の英米圏諸教派でもっとも広く採用され続けている讃美歌の一つ。

21-12「とうときわが神よ」

Dir, dir, o Höchster, will ich singen

1. Dir, dir, o Höchster, will ich singen, / denn wo ist doch ein solcher Gott wie du? / Dir will ich meine Lieder bringen; / ach gib mir deines Geistes Kraft dazu, / daß ich es tu im Namen Jesu Christ, / so wie es dir durch ihn gefällig ist.
2. Zieh mich, o Vater, zu dem Sohne, / damit dein Sohn mich wieder zieh zu dir; / dein Geist in meinem Herzen wohne / und meine Sinne und Verstand regier, / daß ich den Frieden Gottes schmecke und fühl / und dir darob im Herzen sing und spiel.
3. Verleih mir, Höchster, solche Güte, / so wird gewiß mein Singen recht getan; / so klingt es schön in meinem Liede, / und ich bet dich im Geist und Wahrheit an; / so hebt dein Geist mein Herz zu dir empor, / daß ich dir Psalmen sing im höhern Chor.
4. Denn der kann mich bei dir vertreten / mit Seufzern, die ganz unaussprechlich sind; / der lehret mich recht gläubig beten, / gibt Zeugnis meinem Geist, daß ich dein Kind / und ein Miterbe Jesu Christi sei, / daher ich »Abba, lieber Vater!« schrei.
5. Was mich dein Geist selbst bitten lehret, / das ist nach deinem Willen eingerichtet' / und wird gewiß von dir erhört, / weil es im Namen deines Sohns geschicht, / durch welchen ich dein Kind und Erbe bin / und nehme von dir Gnad um Gnade hin.
6. Wohl mir, daß ich dies Zeugnis habe! / Drum bin ich voller Trost und Freudigkeit / und weiß, daß alle gute Gabe, / die ich von dir verlanget jederzeit, / die gibst du und tust überschwenglich mehr, / als ich verstehe, bitte und begehre.
7. Wohl mir, ich bitt in Jesu Namen, / der mich zu deiner Rechten selbst vertritt, / in ihm ist alles Ja und Amen, / was ich von dir im Geist und Glauben bitt. / Wohl mir, Lob dir jetzt und in Ewigkeit, / daß du mir schenkest solche Seligkeit.

21-127「み恵みあふれる」

*Herrasta Veissa Kieleni**English Translation O sing my soul, your Maker's praise*

1. O sing my soul, your Maker's praise / In grateful hymns ascending; / Whose steadfast love has crowned your days / With heav'nly gifts un ending. / I sought the Lord, He heard my cry; / His holy angels hover nigh / The tents of those who love Him.
2. The Lord is good to those who seek / His face in time of sorrow, / Providing comfort to the weak / And grace for each tomorrow. / Though grief may tarry for a night, / The morn shall break in joy and light / With blessings from His presence.
3. The Lord will turn His face in peace / When troubled souls draw near Him; / His loving kindness shall not cease / To those who trust and fear Him. / Our God will not forsake His own; / Eternal is His heav'nly throne; His kingdom stands forever.

21-510「主よ、終わりまで」

O Jesus, I have promised

1. O Jesus, I have promised / to serve thee to the end; be thou forever near me, / my Master and my friend. / I shall not fear the battle / if thou art by my side, / nor wander from the pathway / if thou wilt be my guide.
2. O let me feel thee near me! / The world is ever near; / I see the sights that dazzle, / the tempting sounds I hear; / my foes are ever near me, / around me and within; / but Jesus, draw thou nearer, / and shield my soul from sin.
3. O let me hear thee speaking / in accents clear and still, / above the storms of passion, / the murmurs of self-will. / O speak to reassure me, / to hasten or control; / O speak, and make me listen, / thou guardian of my soul.
4. O Jesus, thou hast promised / to all who follow thee / that where thou art in glory / there shall thy servant be. / And Jesus, I have promised / to serve thee to the end; / O give me grace to follow, / my Master and my Friend.